

## 北宋知識人階層の社会生活における 家妓の役割に関する考察：

—— その可能性と限界 ——

ベヴァリー・ボスラー（カリフォルニア大学デービス校）  
（監訳：平田 茂樹 翻訳：納谷 朝陽）

社会史研究の方法、及びその実践は、歴史研究の“言語論的転回”（linguistic turn）においてしばしば批判にさらされて来た。懐疑派の学者達は歴史資料の不完全かつ構造的な特質を強調し、当時の生活体験の復元が不可能であると指摘している<sup>1)</sup>。このような批判の多くは適切であるが、社会史学者は（すべての歴史学者のように）現存している資料の多くが“事実”を率直に反映していない事に留意しなければならない。記録を残す上で従来は“重要”“公的”または価値があると見なされなかった当時の生活様態に我々が関心を抱く際、過去を理解する上での厳しい限界がはっきり見えてくる。

中国宋代の社会史学者はそれ以前の中国史学者に比べて有利である。なぜなら宋代における印刷技術の発展によって前代以上の幅広く多様な資料が我々に残されているからである。しかし、それと同時に現存する資料は印刷するに値する資料、つまり系統的かつ意図的な傾向にある。現存する宋代資料の多くは当時著名であり尚且つ現在においてもその功績が称えられる男性によって書かれた正式な記録（とりわけ文集）である（女性によって書かれた書物はわずかな例外を除いて保存しておく価値があるとは考えられていなかった<sup>2)</sup>）。さらに“文集”を含む男性の著作は彼の政治的活動や哲学的思惟、又は文学的活動を反映するものであり、また著者の社会的個性を最善に表すよう編纂されている。当然の事ながらそれらの資料は我々が関心を持つ宋代の人々の私生活や社会的活動に関する記録が反映されていない。宋代における男女の関係を書物として残すことは極めて困難であった。特にその女性の法的地位が低い時にはなおさらだ。宋代の女性に関する資料として最も豊富なのは墓誌銘であるが、妾については殆ど記述されていない。このことから男性と妾の關係に関して研究する事は極めて困難だと言う印象を受ける。

しかし本稿において、私は北宋の男性の生活において家妓の役割が意義のあるものだったと言う事が不可能ではないことを示そうと思う。その為には現存する資料を

違った角度から読解し、特に逸話や詩のような文学研究の範囲だとされる資料の歴史的解析を一般化する事が必要となる。ここで私自身が資料の美的認識に無関心であることや、文学資料を用いる際にジャンルの独断的な性格（読解の際に特定の態度や視点を必要とするジャンルであり、そのような態度は常に歴史的に重要であるとは言いきれない）を認識している点を強調しておく。しかし、宋詩は、詩の作成と流通という社会状況において重要な陰影をなす付属の序文、評論、そして詩話が特に豊富である。ここに我々は他の資料には見られない社会生活の側面を垣間見ることができる。

以前の研究で私は北宋の“妾”と言う括りに属していた様々な女性について検討し、宋代における妾の役割を理解するうえで娯楽を取り上げる事が重要であると論じた<sup>3)</sup>。北宋において妾は後継者を残すためにその家庭に連れてこられた上品な育ちをした女性とされているが、それ以上に彼女たちは接待用に訓練されて主人とその客に娯楽を提供することを求められた家妓であった。厳密には真の妾は「良民」の血を引き、「婢」さらには「奴」として購入され、年季奉仕をするが故に「賤」または「下等」だと見下されていた家妓よりも家庭内での地位は高かった。しかし我々はこれらの区別は実際はとても曖昧であり、家妓が上品な育ちの女性に劣らず主人の生活において重要な役割を持っており、主人の子を授かる事さえあった事も知るだろう。実際に私は北宋の家庭内における接待用の妾の存在が‘良’や‘賤’といった宋代の社会的差別を崩壊させる上で大いに貢献する要因であったと論じようと思う。

北宋の家庭内における妾妓の重要性は宋代知識人階層の生活における妓女による接待の普及と関係していた。他の著者が特筆しているように、少なくとも唐後半期より妓女が接待する宴は知識人階層の社交性を表現する重要な場であった<sup>4)</sup>。北宋においては宴会に妓女を参加させる事は知識人階層及び官僚の生活の主要な特徴であった。しかしながら、全ての宴会が雇った芸能人や妓

女を伴い公共の場で開催された訳ではない。それどころか殆どの宴会は知識人階層の家において開催され、主人の妾達によって構成された音楽や女性の接待を伴った。北宋知識人階層の生活における家庭宴会の重要性は1076年元日に自身の体調が悪かったにも関わらず友人達を酒の席に招いた蘇軾の判断に見ることができる。蘇軾は友人の趙成波に宴会の主催者として奉仕することを依頼し、自らは友人達の中でテーブルにもたれかかり彼らの酔態を見ながら気分が高揚していったと記している<sup>5)</sup>。

宋の社会生活において宴会は重要なものだった。なぜなら宴会は知識人階層の男性たちが友人関係を祝福し、地位を競い、そして知識人としての存在証明を示すための場だったからである。このような特徴の一つは、いくつもの宋の逸話の中で明らかにされているように、主催者と客人の両方の所作を統御するため入念に構成された的確な礼儀作法に精通していることである。一例として、著名な博学者の沈括（1031-1095）は裕福な隣人の宴会に参加した石延年（994-1041）の体験を記述している。その隣人は官僚と交流することに慣れていなかったが、石延年在酒好きであると聞き彼を招待した。石延年はその隣人の元を訪れた際に主催者が正装もせず、適切な挨拶の作法について無知である事に気付いて困惑した。珍しい食事と十数人もの家妓による余興で構成された贅沢な大宴会が行われたが、酒が五巡した後その女性たちは引き下がり、主催者も突然立ち上がり挨拶をする事もなく立ち去った。そして石延年はその場に一人きりになった。沈括はこのような贅沢三昧の生活を送る無知で愚昧な男を見た石延年の驚きを「昔の人が“バカな金持ち（錢癡）”とは良く言ったものだ」と結論付けている<sup>6)</sup>。ここで沈括は宋代社会の裕福な男性と彼が本当の意味で知識人であるとみなす知識人官僚‘士’との相違を明確にしようとしている。いづれのグループに属する男たちも宴会と余興を楽しんだであろう。しかし、知識人のみが宴会での行動を差配する適切な所作の規制を理解していた。同様の傾向から、12世紀始めに魏泰は楊繪を「不注意で抑制の利かない」役人で「常につまらない小人と交流している」と述べ、彼によって開かれた悲惨な宴会を軽蔑の念を込めて記述している。その宴会の客人の一人として下級役人で豪民出身の胡師文が招かれていた。胡は科挙に合格していたが、魏泰は「彼には紳士的な修養が欠如していた」と記述している。宴会が進むにつれ胡は酔っ払って接待のために連れてこられた楊繪の家妓のもとに歩み寄った。その下品な行動を見て立腹した楊繪の妻は（彼女は衝立の影からその成り行きを観察していた）妓を呼び寄せて彼女を折檻し始めた。胡は立ち上がり楊繪の元へ行き、その妓を呼び戻すように求めた。楊繪は妻の目の前で恥をかかされ、妓を

呼び戻す代わりに宴会を終了させた。激怒した胡は楊繪を激しく殴打した。他の客人たちの仲介によって楊繪と妻は辛うじて逃げる事ができた。魏泰は偏向した見地から「近臣が自重せず、つまらない人間（小人）に辱められた場合、士大夫の世論（士論）は彼らを軽蔑するだろう。」と結論付けている<sup>7)</sup>。胡は科挙に合格していたため正式には知識人官僚であったにも関わらず、彼の行動は適切な士の規範から外れていた。そしてまた楊繪の評判も士大夫の交流において痛手を被った。北宋は官僚として政府に仕え、且つ知識人としての地位を保持する長い伝統を持たない家柄の男達が富や官職さえ手に入れるような時代であった。そのため沈括と魏泰は、宴会での作法を熟知する事こそが士大夫（士）の真の在り方だと説いた。一般的に「良い作法」と呼ばれるもののように、適切な士大夫の作法は、社会の変化によって挑まれる社会的差異を擁護または支持していた。そして北宋代における作法の重要な要素は、主催者の家妓との交流方法を知ることであった。

鑑賞する娯楽が高まるにつれ、家妓は知識人階層の芸術表現者としても奉仕するようになった<sup>8)</sup>。家妓は骨董品、絵画や毛筆画のように、賞賛や批評の中心であり、他の品物と同様に収集、展示、評価されていた。このような芸術品は主催者と来賓にとって彼らの上品な嗜好を証明するための社会的集会の中心であり、そしてこのような集会は北宋の知識人階層の生活における中心的風潮となった。同様にそれらは後期中華帝国の随所に確認できる<sup>9)</sup>。しかし、鑑賞される美術品の中に家妓が含まれ、その役割を増大している北宋詩の傾向には注目すべきである。多くの北宋詩は、主催者が競って家妓を見世物にしている状況を表している。「楊之美の家の琵琶妓に和す」（又和楊之美家琵琶妓）と題された詩の中で韓維は彼の友人で同僚でもある楊之美を、世間が見捨てたがらくたの中から素晴らしい品を抽出・収集し、骨董品に卓越した最高の審美眼を持つ芸術愛好家を自称していると揶揄するように描写している。韓維は、楊が「幼女を買い、彼女らに音楽を教え、絵や毛筆画を収集している」（買童、教樂收圖書）と観察し、楊の鑑賞品を列挙している。来賓者があった時、時折楊は彼らに感嘆させるために絵画や巻物を飾ったり、児童を呼び出して音合わせに同席させたりした（呼童理弦索）。韓維は破損した楊の書物と絵画を次のように揶揄している。「絹と紙は酷く破れており、インクは滲んで辛うじて読める程度である（破縑壞紙抹漆黒、筆墨僅辨絲毫餘）。」同様に妓も酷いもので「彼女の顔中に白と赤（化粧）が塗られている」（滿面狼籍、施鉛朱）。それでも韓維は、彼女が「啄木鳥」を演奏すれば、その場の空気を幸福で満たすことができると認め、その詩の中で楊が興味を持つのは究極の技術と並はずれた骨董品だけだと断言して

いる（苟非絶藝與竒迹，楊君視之皆蔑如）。韓維の詩は、楊の琵琶妓がこれまで収集した膨大な工芸品の一つでしかないことを明確にしている<sup>10)</sup>。

楊の才能のある琵琶婢を評価しているのは韓維だけではない。梅堯臣と歐陽修も彼女について書き、更には生真面目で女性の魅力に鈍感な事で有名な司馬光までもが彼女の風雅な演奏技術を感嘆している<sup>11)</sup>。司馬光はある詩題でこう説明している。「私は張聖民と共に楊之美の元を訪れ、彼の琵琶妓が「啄木鳥」を演奏するのを聴いた。多くの方々が贈った歌を見たが、翌日私はこの詩を感謝の証として送った（同張聖民過楊之美，聽琵琶女奴彈啄木曲，觀諸公所贈歌，明日投此為謝）。」<sup>12)</sup> この詩は、司馬光と友人がふらりと楊の元を訪れた折に琵琶演奏に歓待されたことに興奮したことを示唆している。司馬光は耳の中で鳴り響くその曲の余韻を残すために三日間耳を洗わないことを誓っている。しかし司馬光の詩は演奏への感謝の念を示すためだけでなく、楊の才能溢れる家妓を評価するために結成された詩会に参加するために詠まれたものであったことは明確である。司馬光は初期の詩で韻を踏もうとはしなかったが、韓維・歐陽、そして梅堯臣らによって書かれた楊の琵琶婢を讃える詩の中で彼の詩の句がそのまま何度も引用され、主旋律として読まれている。ここで特筆すべき点は、楊の琵琶婢による演奏を評価するための詩会が時空を超越している事だ。歐陽修の詩題は彼が劉功曹の家で楊の琵琶婢の演奏を目撃したと示唆している。一方で、その詩よりも明らかに後で書かれた司馬光の詩は彼が全く違う演奏を楊の家で聴いた事を示唆している。

つまり楊の婢に焦点を当てた詩が流布し続けた事実は、楊之美の芸術コレクション（彼の愛らしく、才能豊かな婢も含む）を評価するために高度の芸術感覚を持つ男達が意図的に召集されていた事を明らかにしてくれる<sup>13)</sup>。そしてこれらの詩は詩会の一員である事を公的に主張するため、そして会員同士が競い合うための手段にもなっていた。同時に、これらの詩は間接的に楊と琵琶婢との関係を明らかにしてくれる。その少女（詩の中には彼女がわずか十歳であった事を示唆しているものがある）は楊の交際相手ではなく彼の所有物として示唆されている。そしていくつかの詩は彼女が特に良い扱いを受けていなかった事を暗示しているものもある（彼女は痩せていて貧相な服を着ていたと描写されている）<sup>14)</sup>。詩の作者達は彼女の伎芸に敬服するとともに彼女に対して同情も示したが、しかしそれは愛玩動物に向けられる種類の同情であった。彼女は単なる愛玩動物のように第三者として描写されている。直接的に彼女を言及する事でその存在に価値を与えようとする者は誰一人としていなかった。これは恐らく彼女がまだ非常に若かったことが原因かもしれないが、しかしそれは同時に一部の家妓

が実際は奴隷として扱われていたことも示唆している。

### 妾と男性との深い関係

もし家妓に関する詩が知識人階層の文化における競争や関与の手段だったとすれば、それは同時に親密な友好関係を証明し、強化するための手段でもあった。知識人が頻繁に他者と詩を交換し合ったように、家妓に関する詩は交友の象徴となるものだった。その例として黄庭堅は、彼の友人である王詵（字、晉卿）が所有している笛吹き侍婢に関する何篇かの詩を書いている。それらの詩の一つで黄庭堅は侍婢に向け、彼女の演奏は「水中から竜を呼び出し」、「霜で覆われた日の枯葉を落とす風」をもたらすことで夏の暑さを一掃する事ができると絶賛している。しかし、単に楊之美の琵琶婢を「笛吹きの侍婢」と書いた者達とは異なり、黄庭堅は詩題の中に妾の名前を含む事によって、王詵との深い交友関係を以下のように示している。「大暑の日、水の展示館で晉卿の従者「昭華」が演奏する横笛を聴いている」（大暑、水閣聽晉卿家昭華吹笛）<sup>15)</sup>。他の場所でも黄庭堅は「昭華」を揶揄する詩を書くことで王詵に対する親しみを明確にする一方で、黄庭堅が手に入れたいと望んでいた梅の木を得られなかったことを緩やかにたしなめている。その詩題は「私は千の梅の花びらを王都尉に要求した。彼は花は既に散ってしまったと言った。戯れに私はこれを笛吹きの侍婢を揶揄する詩を書いた。」

（従王都尉覓千葉梅云：已落盡。戯作嘲吹笛侍兒）。この詩には二重の意味が含まれている。

- |         |  |
|---------|--|
| 若為可耐照華得 | もし貴方が待つことができるなら、輝く花を手に入れることができる。                         |
|         | もし貴方がそれに耐えられるなら、輝き（昭華）を手に入れる事ができる。                       |
| 脫帽看髮已微霜 | しかし、私が帽子を取ると貴方は私の髪が既に僅かに白くなっていることに気付くだろう（私は待つには年をとり過ぎた）。 |
|         | しかし、彼女の帽子を脱がしたなら、彼女の髪が既に僅かに白くなっている事を知らるだろう（彼女は老いてきている）。  |
| 催盡落梅春已半 | 梅の花は全て散り、春は半分過ぎ去ってしまった。                                  |
|         | 彼女の梅の花のような美しさはかげり、彼女の人生の半分は終わってしまった。                     |

更吹三弄乞風光 美しい景色を得るため「(梅の花の) 三つの変奏曲」をもう一度演奏してみなさい。  
彼女が再び「(梅の花の) 三つの変奏曲」演奏した時、彼女の以前の魅力を見出すことができる<sup>16)</sup>。

黄庭堅は彼の友人の孔武仲に上質の茶を寄贈した後に、孔武仲から贈られた彼自身の侍婢についても同様に揶揄している。彼は孔武仲の根気のいる古典の朗読は喉が渇くに違いないと、茶と共に幾つかの詩を送っている。更に黄庭堅は自分が送った茶は特定の茶菓子と良く合うだろうとも付け加えている。孔武仲はこれに対して「揚げ菓子は緑珠を悩ませることになるだろう」(煎點徑須煩綠珠)と六朝時代の美女として有名な緑珠と言う妾の名を含んだ詩を返している。黄庭堅はこれが彼自身の平凡な侍婢を揶揄して引用している事をはっきりと理解している。以下が彼の返答である。

小鬟雖醜巧妝梳 幼い侍婢は醜いが、彼女は髪を整える事と化粧をする事に長けている。

掃地如鏡能檢書 彼女は床を鏡のように磨き、書物をきちんとそろえることができる。

欲買娉婷供煮茗 上品で魅力的な侍婢を購入して茶を運ばせたいが、

我無一斛明月珠 私は多量の明月珠を持ち合わせていない。

知公家亦闕掃除 貴方の家もまた床を清掃する侍婢がいない事は承知だ。

但有文君對相如 しかし、貴方には相如によく釣り合う文君がいる。

政當為公乞如願 私は貴方のために如願を探し求めよう。

作牋遠寄宮亭湖 草案を書いた後にそれを宮亭湖に送ろう。<sup>17)</sup>

この詩に含まれる多数の比喩は暗黙的に黄庭堅の友人と過去の時代に美しい事で有名であった妾の主人(及び主人になり得る者達)とを比べている。「多量の明月

珠」という句は、ある逸話の中に登場する多量の真珠で買われた緑珠に言及している。卓文君と司馬相如は漢王朝時代の有名な夫婦である。即ち詩中での「文君」とは孔武仲の妻を指しており、黄庭堅が孔武仲から妾を受け取ることにしてその妻が妨害していることをほのめかしている。これは司馬相如が妾を取ろうとしていた折に卓文君が「白髪の嘆き」と呼ばれる詩を書いた為に思いとどまった話にちなんでいる。志怪小説『搜神記』の記録によると、如願は宮亭湖の神が最良していた人間に贈った侍婢だった<sup>18)</sup>。

侍婢を揶揄する事は北宋の詩の世界において、ただ作者とその受取人との交友関係を築き、深める為だけでなく、文学を誇示する為のごく一般的な手段だった。蘇軾は、張先が八十五歳でもまだ妾を買っていた事実を元に親しみを込めて戯れつつ祝賀の詩を書いた<sup>19)</sup>。趙鼎は病気を口実に集会を抜け出し、のちに若く美しい妾に囲まれた生活が露見した友人を諷める、彼自身が「不作法」であると述べた詩を作った<sup>20)</sup>。男達は宴会の主催者やその妾たちからの直接的な要求を受け家妓に対する詩を書く事もあった。そのような機会に自発的に適切な詩句を用いる事は真に才能がある証拠と見做され、一種の文学的な挑戦でもあった。それゆえ蘇軾は所有する妾の中から歌舞をする者を選択し、僧侶道潛から詩を書いてもらうように仕向けた。道潛はこれに対し、彼女の魅力には無頓着であるという彼の精神性を公言した詩句を書いた<sup>21)</sup>。韓絳に気に入られていた家妓が蘇軾に彼女の扇子の上で詩を依頼した折に蘇軾は最初の詩句に踊り子の名前を文字を言葉遊びで置き換え、二番目の詩句では宴会の開始当初彼女が蜂に刺された事実の比喩を組み合わせ合わせた素晴らしく巧妙な詩で返答した<sup>22)</sup>。別の機会に蘇軾は自発的に「趙成伯の家にいる美人が我が故郷の出身である事は光榮の至りだ。彼女は祝杯を上げようとはせず、ただ春の雪について愛らしく詠唱している。そして私は彼女の韻文に悪ふざけで合わせている。」と作詩している(趙成伯家有麗人, 僕忝鄉人, 不肯開樽, 徒吟春雪美句, 次韻一笑)<sup>23)</sup>。このような詩の中で家妓は男性間の友情の表現手段となっている。しかし同時に芸妓を単なる所有物以上の物として扱い、彼女らは皮相的に彼女らの主人を揶揄するのに利用されている。そこには詩の本来の観衆ではなく女性達自身が主人を揶揄するのに使われたことへの満足感を共有していたことを垣間見ることが出来る。

もし侍婢への悪ふざけがある段階で男性間の友情を表現していたとすれば、別の段階でその友情は友人の妾の官能的な批評を示唆する詩の中で再現されている。歐陽修は彼の友人劉敞に送った詩の中で、官職に就く為に出発する前日に劉敞の家で開催された彼らの最後の酒宴に関する思い出にふけている<sup>24)</sup>。歐陽修はその時泥酔

しており劉敞に別れを告げた記憶が無いことを認めている。しかしながら彼は劉敞が買ったばかりの幼い侍婢に夢中だった事を覚えており、その侍婢を「まだ誰も触れていない咲いたばかりの花」に譬えている（愛君小鬟初買得，如手未觸新開花）。隱喩的表現を使用しているが、歐陽の詩句は単に劉敞の新しい遊び相手の身体的な魅力を表現しているだけでなく率直に処女的な姿を強調することで官能的本質を認めている。梅堯臣は「劉元忠の幼い侍婢が舞うのを見て」（觀劉元忠小鬟舞）と題された詩の中で同様の表現を使用している。

桃小未開春意濃 小さな梅の花はまだ咲いていないが、春の訪れは色濃く感じられる。

梢頭綠葉映微紅 先端の緑の葉は僅かに紅く輝いている。

君家歌管相催急 貴方の家では歌と笛の音が互いを急ぎ立てている。

枝弱不勝花信風 儂い枝は花信の風に耐えられない。

ここでは「春の訪れ」で少女の若さと明確な純潔を引用する事で（歐陽修の詩のように）官能的要素が強調されている。最後の二行は特に歌と音楽が「互いを急ぎ立てている」場面で、「儂い枝」は花を開かせようとする暖かい春風に耐えることができないう性的な刺激をほめかしている<sup>25)</sup>。

ある北宋詩（悪名高いものの非常に人気のある柳永のような詩）ほど性的にあからさまでない一方で、これらの詩は公言されない夜の女性達ではなく知識人の従者として所有され少なくとも名目上はいづれ他の知識人の母になり得る女性たちを引用している点で際立っている<sup>26)</sup>。少なくともこのような詩は宋代において（後の逸話研究家たちを虜にしたにも拘わらず）次第に許容されなくなった妾の性的な一面を率直に物語っている<sup>27)</sup>。しかしこのような詩は「男性間の絆を深める」ための手段として明確に機能しており、友人の（実際の相手またはその可能性のある）性的な相手の批評を分かち合う事で彼ら自身を友情の輪の中に置いた<sup>28)</sup>。それと同時に、侍婢が主人の性的欲求を満たすための対象として描かれているこれらの詩は彼女達を単に装飾品とはせず、幾分か人間らしく扱っている。彼女達が所有物として見做されていたことに変わりはないが、主人の気を引くだけの価値があり、主人にとって所有物以上の存在になり得ることは否めない<sup>29)</sup>。

## 妾と情事

家妓が時折主人の単なる慰み物以上の存在だった事は男達の恋愛関係と妾に対する愛情を強調している詩の中に明言されている。例として、郭祥正は「美人の曲、偉大なる主人鍾離の侍婢に捧ぐ」（麗人曲，贈鍾離中散侍姬）と題された詩の中で、彼の友人に思いを寄せている（この詩の受取人であろう）美しい踊り子について楽しみに描写している。

髮如盤鴉面如玉 巻かれた漆黒の髪，翡翠のような顔。

飄飄羅袖長芬馥 絹の薄織の袖がふわふわと愛らしい匂いを漂わせる。

妙年得侍碧虛鄉 青春の最盛期にいる彼女は蒼穹の地に仕える。

自道一生心已足 彼女は自分自身に心は既に満たされたと言う。

黃鶯流語春日長 鶯の囀り，春の日はまだ長い。

綠窓繡出金鴛鴦 緑の窓辺で彼女は金色の鴛鴦を刺繡する。

朝暮祝卿千萬壽 朝も夜も彼女は「貴方，人生は長いわね」と囁く。

不識相思能斷腸 愛を切望する事は誰かの心を傷つけるとは気付かずに<sup>30)</sup>。

この詩は美しさと恋愛（蒼穹）のイメージと夫婦間の喜び（鴛鴦）を結合している。それは恋人同士で分かち合う幸福を認知する一方で、そのような状態は永遠に続かないことを警告している。

趣向は些か異なるが、梅堯臣は友人の刁約（字、景純）への励ましを示した詩を二つ書いた。彼の笛吹きは命に係わるマラリアの発作から回復したばかりだった。「刁景純の侍婢がマラリアから回復したのを聞いて（聞刁景純侍女瘡已）。」と題された詩は次の詩句で始まる。

前時君家飲， 先日貴方の家で飲んだ時， 笛吹き  
不見吹笛姬 美人を見かけなかった。

君言彼娉婷， 貴方はその小さな人気者はマラリアに罹り長い間治療を受けている  
病瘡久屢治 と言った。

そして梅堯臣はその後の詩句で彼女の病気の経過について描写し、医者と道士がそれぞれ治療を試みたが双方が異なった診断したと述べている。梅堯臣は彼女が生き延びたのはそのような世話のお陰だけではない事を示して次のように結論付けている。

今雖病且已， 今彼女の病気は治まりつつある  
皮骨尚尪羸 が、彼女の衰弱した身体は脆く弱  
弱しい。

豈暇理舊曲， 自分の蛾眉さえ書くことができな  
未能畫蛾眉 い状態でどのようにして古い曲を  
演奏する余裕が持てようか。

當期重相見， 風と月光が中庭に訪れるように、  
風月臨前墀 我々は時が来ればまた会う事がで  
きるだろう<sup>31)</sup>。

梅堯臣の詩は友人の愛人への親しみと、刁の従者が彼女の面倒をみるために費やした努力の両方を示している。「風と月光」と「蛾眉」の引用は彼女と主人の恋愛の本質を強調している。彼らの情事は梅堯臣の「景純は彼の侍婢が病に倒れた為、満月の日に（劉）原甫と飲むことを了承した」（景純以侍兒病，期與原甫月圓為飲）と題された二番目の詩でさらに仄めかされている。ここで我々は刁の「家は閣下を満足させることができる素晴らしい笛を所有している（家有善笛能娛侯）」の句に於いて、ここでの笛が笛吹き侍婢を換喩していることを知ることができる。梅堯臣は刁が初めて南部からこの少女を連れて来た際に彼女に衝立障子の裏で彼の友人のために演奏をさせたことを記述している。彼はもし彼女が再び病に罹ったら二度と彼女を見ることが出来なくなるだろうから、彼女が完全に回復するのを我慢して待つようにと劉原甫に促すと結んでいる<sup>32)</sup>。

梅堯臣による二番目の詩は詩会の他の会員を鼓舞させた。韓維は「景純の笛吹き妓が病から回復したのを聞いた聖俞（梅堯臣）の詩に和する」（和聖俞聞景純吹笛妓病愈<sup>33)</sup>）を書いた。ここでもまた『詩経』を引用し、二重の意味を持つ詩句が優しく刁をからかっている。その最初の二行は町での彼の男性としての名声と、妾を獲得する「好事家」としての彼の評価を同時に言及する為に二通りの意味がとれる曖昧な語句を利用している。終わりの二行は周王が東周から戻る事に失敗した為「挫折」として描写され、「平静な」（窈窕と表現される言葉で、「愛らしい」又は「可愛い」の意味を持っている。）女性こそが紳士から求められる適切な相手だと表現されている。

刁侯好事聞當年 刁侯は恋愛沙汰の多い男性だと数  
年前に聞いた。  
刁侯のその年の好事について耳に  
した。

至今風韻獨依然 今日彼は今までに無いほど威勢が  
良い。  
今日彼は今までに無いほどの恋愛  
をしている。

歸來不作留滯歎 彼が戻ってから挫折でため息をつ  
く事は無くなった。

能出窈窕夸樽前 彼は宴会を飾るため窈窕なる美人  
を連れてくる事が出来た。

そして、韓維は刁の笛吹きの壮観な演奏についての瞑想にふけり、明確な期待と共に締めくくっている。

氣羸曲節宜少緩 もし彼女の活力が弱かったのなら、その曲の律動はより重苦しくなっていただろう。

體軟舞態當益妍 もし彼女の体が衰弱していたのなら、彼女が躍る姿はより誘惑的になっていただろう。

人生行樂不可後 人生の行樂を追求する事を後回しにする事は不可能だ。

幸及華月秋娟娟 幸運にも満月が訪れる頃には素晴らしい秋になるだろう。

これらの詩の中で我々は少女自身の魅力に対して共通認識を持つことや、友達の彼女に対するロマンティックな心情を熟知することを通じて、再び男性の友好関係を見ることができる。

刁の友人達は彼の侍婢に対する愛情を知っていたため彼女の回復を祝った。また男達は、他の友人が愛する妾を失った際にも追悼の詩を書いている。謝適は「李簿の家には歌舞に優れた妙麗と言う名の侍婢がいた。皆は彼女の死を悲しみそして詩を書いた。そして私も書いた。」（李簿家有侍兒妙麗善歌舞，諸人惜其死為賦詩，予亦賦<sup>34)</sup>）と題された対になった詩を書いた。妻に先立たれた男達が自分達の手で追悼の詩を書く事も時折あった。例えば外戚の李端懿は、蔡襄の祝祭の詩から畏まった追悼の詩（挽詞）を独特の調子で引用し、故侍婢に敬意を表した。蔡襄は彼女を汾陽夫人と呼ぶことで彼女

を天国に帰っていった不滅の死として捉えている<sup>35)</sup>。

このような詩は更に家妓は北宋の知識人階層にとって重要な恋愛対象に成りえた事を明白にしている。ここで我々は家妓達が主人との完全な交際相手にはなり得なかったものの、少なくとも愛着と関心の対象であった事を確認できる。再度言及しておくが、ここでの主人と妾の関係性とは飽く迄間接的なものである。女性に対する興味や情熱を直接表現する北宋の詩は極めて少なく、我々がそのような詩（大半が詞の形式）を見る場合、それらは事実上常に抽象的で他者を明確にしないことに焦点を当てているからである<sup>36)</sup>。そして、しばしば男性が妻に対する愛情を表現している詩歌を目にする中で（その殆どはその妻の死後に作詩されているが）、男性詩人が彼らの侍婢に対して書いた詩歌は殆ど保存されていない。しかしこれには大変重要な例外（この例外は後の時代において恋愛的に優れたものと評価されている）がある。それは蘇軾である。彼の収集作は彼の家妓朝雲に捧げられた詩と韻文の両方を含んでいる。

#### 蘇軾と王朝雲

朝雲に関する我々の知識の大部分は蘇軾が彼女のために刻した墓誌から来ている。蘇軾はこの簡潔且つ非常に慎重な記述で、朝雲を彼の侍婢で姓は王、字を子夏、錢塘出身として記している。彼は彼女を賢くて公正であると記述し当初から忠実で礼儀正しいまま二十三年間仕えて来たことと付言している。彼女は一歳の誕生日を迎える前に亡くなった遯と名付けられた息子を産み、1096年、三十三歳の時に惠州で没した。蘇軾は彼女がかつて尼僧の義沖について仏教を学び、その概要を理解していたと記している。さらに蘇軾は朝雲が亡くなる直前まで金剛經を朗唱していたことも書き加えている<sup>37)</sup>。この記述は墓誌としては典型的であり、彼が公的に彼女の墓誌を書くことによって彼女に名誉を与え彼らの関係を権威づける事を選んだという重要な事実以上、蘇軾と朝雲との関係については殆ど言及されていない。その碑銘は、賢く公平で尊敬できる存在であり、かつ忠実であるといった上級階層の女性の有様を朝雲に付与している。それでもその墓碑は1073年に彼女が十歳の子供だった折に蘇の家庭に入ったことを示している為、彼女の地位が妻と言うよりも妾であった事を明白にしている。（その当時蘇は三十七歳だった。彼の二番目の妻もまた王と名付けられており二十五歳で前年に彼らの二番目の息子を授かったばかりだった）<sup>38)</sup>。

蘇の朝雲に対する愛情は、彼女の息子を悼む為に蘇が書いた二つの詩によく現れている。その詩の題名は説明的な前書きとしての役割を果たしている。「去年の九月二十七日に黄州で私の息子の遯が生まれた。赤子の時の

名は幹兒と言う。彼は体格もよく賢かった。今年の七月二十八日に金陵で彼は病気に罹り死んだ。私はこの二つの詩を哀悼のために書いた。」<sup>39)</sup> 最初の詩は幹兒が死んだ時、蘇は四十八歳だったと述べている。即ち朝雲が丁度二十歳の時にその赤ん坊は生まれたことになる。その詩は更にその子がどれほど蘇に似ていたか（彼は「間違いなく自分の息子だ（真吾兒）」と述べている）、その赤ん坊のおどけた仕草に対する喜び、そして痛ましいその赤ん坊の突然の死を描写している。二つ目の詩は蘇がその子の母親と分かち合った悲愴な感情を強調している。

我涙猶可拭, 私の涙は拭い去ることができる。  
日遠當日忘 遠く過ぎ去る日々と共に忘れ去る事ができるだろう。

母哭不可聞, お前の母親の泣き声には耐えられない。彼女は死んでお前と一緒に  
欲與汝俱亡 になりたいとさえ思っている。

故衣尚懸架, お前の古い衣服はまだ棚にかかっ  
漲乳已流牀 ている。彼女の張った胸から出る  
母乳は寝台を濡らしている。

感此欲忘生, この感情に直面している今、人生  
一卧終日僵 を忘れてしまいたいと思う。私は  
疲れ果て、一日中呆然と横たわっている。

蘇軾と朝雲の更なる関係については1094年の後半に蘇軾が再度追放され惠州に到着した直後に彼女の為に書いた詩によって知ることができる。その詩はまず唐の詩人白居易を引き合いに出している。白居易は彼が病に侵されている間、断固として彼の元を去ろうとしなかった侍婢樊素の忠実さを名誉に思う詩を書いている。そして結果的に白の元を去ってしまった樊素に着目し、「我が世帯には数名の妾が居たが彼女らはその四年無いし五年の間に引き続いて出て行ってしまった。ただ一人朝雲と呼ばれる者だけが私に着いて南部まで来た。私は白居易の詩集を読んでいたのでこの詩を冗談半分で書いた。」と述べている。この詩の冒頭の引用は彼らの子供の死と朝雲の仏教の学習を間接的に引用している。一方で最後の四行は二人の過去、現在、そして未来の関係を引き合いに出している。

經卷藥爐新活計 經典の朗誦と錬金術の試練が我々の  
新たな業だ。

舞衫歌扇舊因緣 踊りの衣装と歌の扇は我々の古い

因縁だ。

丹成逐我三山去 靈薬が準備できたら三山まで私に  
付いて来なさい。

不作巫陽雲雨仙 巫山の雨や雲の仙人になってはい  
けない<sup>40)</sup>。

これらの詩句は彼らが道教と仏教の教えを実践するために世を捨てたことを暗示すると同時に、この二人の追放された状態を詠んでいる（それはまた他の資料にも幅広く証明されている様に蘇軾が仏教と道教に対して真剣に傾倒したことを示しているように思われる）。最後の二句で蘇軾は彼らが十分に浄化された時には蘇が向かう三山にある永遠の住居に随行することを朝雲に嘆願している。同時にその四行の詩は彼らを縛り付けている「古い宿命的な繋がり」、つまり朝雲には歌舞の妾としての役割があることを基にしている<sup>41)</sup>。この句の注目すべき点は朝雲が蘇軾の芸妓として彼を支えていたことを明確にしている点である。

また我々はこの詩の序文から蘇軾に仕えていた妾は朝雲だけではなかったことを学ぶことが出来る。そしてその事実は他の妾達の立場や蘇軾の元から離れた後、彼女達がどのような生活を送ったのかと言う非常に興味深い返答の余地の無い疑問を思い起こさせる。我々は朝雲の決意（蘇軾はその決意は彼女自身がしたものであると強調している）が難しいものだったことが推測できる。なぜなら蘇軾が左遷された時、朝雲は二十年以上にもわたって彼と共に暮らし（その時点で彼女の人生の三分の二であった）、子供を儲け、そしてその子供の死を共に嘆いているからである。彼女が不用意に彼の元を去ったり、或いは彼女に別の選択肢があったことを想像することは困難である。一方で惠州は後進的で居心地が悪く、マラリアの多い場所として認識されていた。そのためそこに追放される事は死刑判決を下されるのと同様であった。実際にそれは朝雲の例でも証明されている。蘇軾が彼と共に残ると言う彼女の決意を異常なまでの忠誠心による行動だと見做していることは確かである。つまり彼の詩は感謝と愛情の意思表示なのだ。

最後に、蘇軾の朝雲に対する愛情は哀悼の詩と朝雲に捧げた祈りの中で明らかになる（「悼朝雲」、「惠州薦軾朝雲疏」）<sup>42)</sup>。この詩の序文で、蘇軾は惠州で朝雲が病のため死亡し仏寺の近くに埋葬されたことを述べている。墓誌の中で蘇軾は朝雲がもともと読み書きが出来なかったものの後に勉学に励み幾分か読み書きの能力を獲得したことを入念に記している。また彼は彼女が泗上にて尼義冲について仏教の学習を行ったと描写している。わずかな情報ではあるが、朝雲が学んだ時期は1084

年の後半だと確定できる（その時期から察するに朝雲に仏教の学習を鼓舞させたのは彼女の子供の死であった）<sup>43)</sup>。蘇軾の祈りの文章は朝雲が仏に受容された瑞兆を描写し、彼女の死後蘇軾も同様に仏教の中に安住の地を得たことを示唆している。

朝雲のために書かれた作品が感情を誇張して書いたと断定するのは憚れるが、朝雲への文章と蘇軾が二人の妻へ向けて書いた文章とを比較すると前者における間接的かつ率直な愛情の表現が非常に際立っている。1065年、蘇は最初の妻の死に対する墓誌を書いているが、それらは彼が母親に命じられて書いたものと言う事が碑文の中から伺える。その文は（朝雲への追悼の碑文の様に）儀礼的で故人の美德を賞賛するものであったが、そこにはわずかに彼の本心が垣間見える<sup>44)</sup>。蘇軾は彼が惠州に左遷される少し前に亡くなった二番目の妻に対する追悼碑を書いていない。彼は彼女の為に四つの詩を作詩しているが、その内三つは単に彼女の記憶の中で描かれた仏の想像図に対して呈したものであり、その内の二つは蘇軾の息子が原因で書き始めたものである。蘇が二番目の妻の為に書いた最も個人的な文章は祭文である。それは彼女がよき妻であり母であった事と、何も言わずに彼について南方（左遷された初期の段階）へ来た事を褒め称えているが、明確な深い愛情を表してはいない<sup>45)</sup>。つまり、現存する蘇軾の作品は二人の妻のいずれとも持ち得なかった深い恋愛を朝雲との関係において満喫していたことを示唆している。また、朝雲の存在が蘇軾の詩的感性に貢献していた可能性を示す証拠も存在する。近年の蘇軾に関する研究でロナルド・イーガン（Ronald Egan）は、1073年までの間蘇軾は詞を殆ど書いていないが1074年以降大量の詞を書き始めたかと考察している。イーガンは蘇軾が詞を書き始めた当初に作詩した多くの詩を形式的な宴会の歌と特徴付けている。これは状況証拠に過ぎないが、1073年に朝雲を妓女として蘇軾の家に受け入れた事で、余興で彼女や他の妓女に歌わせる為の歌を作詩するのにより力を注ぐことになったと考えるのが妥当である。イーガンが指摘しているように蘇軾の詞的形態への取り組みは最終的にこのジャンルを作り変えていった<sup>46)</sup>。

朝雲と蘇軾の関係を見る最終的な手段は数々の皮肉を込めた彼の警句（雜纂）の一部にあるかもしれない。蘇軾が「初老の嫉妬深い妻と過ごさなければならない」事を「不幸」と定義付けた時や、彼が「訳が分からない」、「侍婢について口論している夫と妻」と詩題で表現している時は個人的な経験を述べていたのだろうか。「人の中の愛情を呼び起こす」と言う範疇の中で彼が「上手に踊って歌える若い妓女」と述べている時、彼は若かりし頃の朝雲に言及していたのだろうか。最後に、「お気に入りの妾だけが主人が役職に就くのと同行して



きた」事を「その折は落ち着くことができた」と明言した時、彼自身の状況について考えていたのだろうか<sup>47)</sup>。

我々は蘇軾と朝雲の関係を僅かにしか垣間見ることが出来ないが、この二人の関係は北宋代にあった妾と主人の恋愛関係を間接的に見るための展望としての役割を果たしている。蘇軾の友人らが彼の人生における朝雲の重要な意義に気付いていた事は多くの資料によって証明されている。黄庭堅は朝雲の名を語呂合わせにして蘇軾の為に詩を残している。その詩で彼は婉曲的に蘇軾が新しい役職に就く事は「朝方の雲を従え、不明瞭なまま終わる事」のようにそれ程良い事では無いのかも知れないと示唆している<sup>48)</sup>。蘇軾自身も友人の陳季常に宛てた手紙の中で「末子の過と老雲並びに二人の老婢」を従えて惠州に旅立つと暗示している（幼子過及老雲并二老婢）。良く知られた接頭語である「老」と共に朝方の雲を指し示す事で蘇軾はこの三人の中で培われた互いの深い共有関係を明らかにしている<sup>49)</sup>。同様に彼の友人李廌（方叔）に宛てた手紙の中で蘇軾はまず「長安君」の病気に対する同情の念を表し、彼女の病気を治すための特別な薬を進めている。そして次に朝雲が少し前に惠州で死んだことを報告している。蘇軾は彼らが最後に李と別れてから朝雲は字を学び仏教を勉強していた事を付言している。そして彼女が経を朗誦しながら死んだ事と彼女の埋葬を彼が差配したことを加えている。蘇は「彼女は夫人にとっても愛されていた。その為私はこのように細かく記述している」と締めくくっている<sup>50)</sup>。もはや長安君を特定する事は不可能であるが、彼女が李廌の世帯の一員だったことは窺える。このことから蘇軾が彼女と顔見知りだった事は明白であり、そして同様に李廌、長安君と朝雲は顔見知りだったことも明らかである（蘇軾の手紙の表現は彼女に関する質問に返信していることを暗示している）。それ故、蘇軾の連れ合いとしての朝雲の立場は彼の日常生活において周知の事実であり、南宋における彼らの恋愛が逸話研究家達の格好の話題になっていた事は後期帝國の時代を通じて踏襲されている。

結局、我々は北宋における男達とその妾との関係について学ぶことができたのであろうか。我々が知り得る事実には決定的な限界がある。ある段階において男達が家妓に関する多様な「意思伝達」を行ってきた事は確かであるものの、女性達自身は完全に沈黙しており、私たちはどのような男性が女性を描写しようとしていたかを知ることができるだけである。

しかし彼女達が描写されたものを通して、我々は彼女らの存在の側面を垣間見ることができる。家妓はしばしば幼女のうちから士大夫の家庭内に受け入れられていた事から、彼女らの若さと純潔ぶりが彼女らの魅力の重要な一部となっていたのは明確である。彼女らは知識人層

の男達と同じように社会的な場に出る事を禁じられていたが、何よりもまず現存資料から読み取る限り他の芸妓のように彼女らはしばしば批評されていた。彼女らの美しさと才能は度々賞賛と競争の焦点となっていたが、彼女らの観客は彼女らに対して人間としての興味を殆ど持ち合わせていなかった。

それでも我々はまた家妓と主人との関係は劇的に変化し得る事も確認してきた。一部の女性は美的な賞賛や鑑賞のための飾りであるかの様に粗末な扱いを受け、奴隷以外の何者でもなかった。さらに家妓は時折主人の性的欲求や多情な深い関係を満たす者としてのみ人間扱いされ、性的欲望更には恋愛の焦点となっていた様に思われる。そしてある場面においては我々が蘇軾と朝雲の関係に見たように家妓は彼の友人に認められ、高く評価されながら長い期間主人に奉仕し、主人との人生を共有しながら愛情と尊敬の対象になり得た。

このような家妓の立場は後々の北宋社会で特別な意義を持っていた。下層社会の情事を知る上で、上層社会の男性に仕える「下等な」女性は大変重要であり、そして宋の社会階級の区別を崩壊させることに貢献した。少女奴隷との性的関係は彼女と主人とを分ける社会的な隔たりを埋めなかったかもしれないが、恋愛の概念は社会的に平等でなくとも女性の役割についてのある種の自立や選択の幻想を必要としていた<sup>51)</sup>。確かに家妓は知識人階層の余興のために買われてきたかもしれないが、少なくとも主人の愛情に応答するか否かを定めるのは彼女の自発的な意志である。言い換えれば、家妓との関係が恋愛か否かの判断は主人が彼女の人間性を認め、正真正銘の感情的な返答が出来る者として彼女を認識する事が必須条件である。このような認識は‘良’と‘賤’の識別にとって有害であった。なぜならその識別において、‘賤’の地位にある人々は人間以下であるという前提がなされていたからである。

もし主人との恋愛関係が‘賤’に分類されている家妓としての規範に相反するならば、その見解は彼女が知識人階層の子供達の母となった場合により複雑な問題になってくる。宋代以前においては父親の正妻が合法的かつ形式的に（誰が出産したかに関わらず）全ての子供の母親であることを定める社会的習慣によって‘賤’が妊娠する問題は都合よく省略されていた。しかしながら北宋では正妻に対する法的な制度が続いていたにも関わらず、生みの母親との家族関係を人前で見せる新たな道徳が男達の間で広まっていた<sup>52)</sup>。家妓との恋愛の概念のように、彼らの子供の家庭に対する心情を強調する必要があると言うこの生みの母親に対する新しい認識は経済の成長や新しい機会（科挙の制度によって作られたものも含む）によってもたらされた階級や地位の振る舞いの広い変化の現れだと見解することも可能である。しかし

ながら、それと同時に、名目上は「下等な」生みの母親の存在が認識される事は「良」と「賤」の区別が一層崩壊してきたことによるものである。

## 注

1. 宋史の分野における社会史の最新の批評については Christian de Pee, *The Writing of Weddings in Middle-Period China: Text and Ritual Practice in the Eighth through Fourteenth Centuries* (SUNY Press, 2007) 参照。De Pee は「現代の優越的な価値観に立ち、客観的な用語を用いてに劣等的な過去を描こうとした」と記述している (248頁)。
2. ここでの明らかな例外は李清照であるが、彼女は作詩、作文の面で単なる宋代女性とはかけ離れている。
3. Bossler “Shifting Identities; Courtesans and Literati in Song China” *Harvard journal of Asiatic Studies* 62.1 (June 2002) :5-37, “Songdai de jiaji he qie 宋代的家妓和妾” (張国剛編『家庭史研究的新視野』, 北京: 新知三聯書店, 2004) 206-217, 及び “Song-Yuan mu zhi zhong de ‘qie’ zai jia ting zhong de yi yi qi li shi bian hua 宋元墓誌中の「妾」在家庭中的意義及其歷史變化”, 東吳歴史学報 [Soochow Journal of History] 12 (December, 2004) : 95-128参照。
4. 男性の社交形式における女性に対する記述は Paul Rouzer, *Articulated Ladies, Gender and the Male Community in Early Chinese Texts* (Harvard University Asia Center, 2001) を参照。
5. 蘇軾『蘇軾詩集』(中国古典文学基本叢書), 14.663-665
6. 沈括『夢溪筆談』(文淵閣四庫全書, vol. 682), 9.6a-7b. この逸話の原本では、石延年は曼卿の異名で呼ばれている。
7. 魏泰 (fl. ca. 1070-1110), 『東軒筆録』(唐宋史料筆記叢刊, 北京: 中華書局, 1997 [1983]) 7.77-78. また Patricia Ebrey, *The Inner Quarters: Marriage and the Lives of Chinese Women in the Sung Period* (Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press, 1993), 225-226参照。この話の中で男性達が妾を使い、彼らの客人達を歓待していた事実を述べている。
8. 北宋の熱狂的な骨董収集の文化的な表現については Ronald C. Egan, *The Problem of Beauty*: (Harvard East Asian Monographs, Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Asia Center, 2006) and Christian de Pee, (SUNY series in Chinese Philosophy and Culture, Albany: State University of New York Press, 2007) を参照。
9. 宋詩の社会的な活用においては Colin S. C. Hawes, *The Social Circulation of Poetry in the Mid-Northern Song* (State University of New York Press, Albany, 2005) を参照。後期中華帝国における鑑賞の社会的機能についての新たな文献がある。例として, Tobie Meyer-Fong, “Making a Place for Meaning in Early Qing Yangzhou” (*Late Imperial China* 20:1 (June 1999), 49-84); Craig Clunas, *Superfluous Things: Material Culture and Social Status in Early Modern China* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991) 参照。17世紀における芸妓の鑑賞については Sophie Volpp, “The Literary Circulation of Actors in Seventeenth-century China” (*Journal of Asian Studies* 61.3 (Aug., 2002) , 949-984) を参照。
10. 韓維 (1017-1098), 『南陽集』(WYG 1101) 5.8-8b. 「之美」は楊の異名とされている。韓維の詩題は同様の題材についてより有効なもの存在を示唆している。韓の収集物には誰も題材として触れていない楊之美に注目した詩も含まれている。
11. 楊の琵琶婢を題材にした全ての詩において、楊之美は、歐陽修の梅堯臣の詩に返答した詩に出てくる「講師、褒」と同一人物である。歐陽修の『歐陽修全集』(北京: 中国書店, 1986) 7.47, “於劉功曹家見楊直講女奴彈琵琶戲作呈聖俞”と、梅堯臣の『梅堯臣集編年校注』(朱東潤編, 中国古典文学叢書, 上海: 上海古籍出版社, 1980) 27.981, “依韻和永叔戲作”を参照。梅の作品における最近の編集で梅の詩が歐陽修のそれと重なることから、1057年へと年号が変更されている。
12. 司馬光『司馬文正公伝家集』(萬有文庫會要, 国学基本叢書, 台北: 台湾商務印書館, 1965.), 2.13-14.張民は張蕪 (1015-1080) の異名である。
13. 歐陽修は他の場所において、楊褒の美的判断を「絵や道場が好きであるが、理解できていない」者と実際に誹謗している(歐陽修『歐陽修全集』, 5.1155, “唐薛稷書”)。
14. 彼の著書 *The Social Circulation of Poetry in the Mid-Northern Song Emotional Energy And Literati Self-Cultivation* (Albany: State University of New York Press, 2006), 54.の中で, Colin Hawkes は歐陽の詩の部分的な翻訳をしている中で、梅と歐陽は楊の家妓がみすばらしい身なりをし、十分に食べ物を与えられていない事にショックを受けたことを示唆している(歐陽の詩の最後の句が梅の批判から楊をかばおうとしているにも拘わらず)。司馬光は詩の中で美しさとは丹念に作られた絹の衣とは全く関係ないことを遠まわしに仄めかしている。
15. 黄庭堅『黄庭堅全集』(成都: 四川大学出版社, 2001), 別集 1.1472 この詩は1088年のものと推定される。
16. 黄庭堅『黄庭堅全集』外集, 11.1136. “Plum Blossom, Three Variations” は有名な曲の題名であった。私はこの詩に二つの意味があったことを教えてくれたステファン・ウェスト教授に感謝している。涼しい眠りをもたらす竹の敷物についてのおどけた詩の中で、黄はまた他の王に仕えている芸妓に対して輝きという言葉も使っている。黄は詩の中で青奴と冗談のように名付けられたその敷物を夜を盛り上げる人間の奴に例えている。『黄庭堅全集』正集, 10.246.を参照。
17. 『黄庭堅全集』正集, 4.89.
18. 宋の任淵『山谷内集詩注』(四庫全書, v. 1114), 6.9a-9b.を参照。任は黄の詩句のいくつかが杜甫の初期の詩を示していることを指摘している。
19. 蘇軾『蘇軾詩集』, 11.523.この詩は張という姓の何代かにわたる妾との関係を述べている。そして北宋代も含む噂話を喜びながら繰り返し述べている。趙令時『侯鯖錄』(唐宋史料筆記叢書, 中華書局, 2004 (2002)), 7.178並びに李彭『日沙園集』(四庫全書, v. 1122) 8.16b.を参照。
20. 趙鼎『竹隱時士集』(四庫全書, v. 1124) 6.6b-7a.
21. 釋道潛 (b. 1043) 『參寥子詩集』(四庫全書, v. 1116) , 3.5b.
22. 『蘇軾詩集』, 30.1565-1566. また『侯鯖錄』, 4.100参照。
23. 『蘇軾詩集』, 47.2526-2527. 他にも多くの例が引用されている。蘇軾と趙成伯との交友についての歴史を垣間見るためには“密州通判廳題名記”(『蘇軾文集』(孔凡禮編, 中国古典文学基本叢書, 北京: 中国書店, 1986), 11.376を参照。
24. 『歐陽修全集』, 6.40, 重贈劉原父.
25. 梅堯臣『梅堯臣集編年校注』 28.1005.劉元忠は劉瑾の呼び名である。花信風と言う言葉は花を咲かせる風を示している。その風は24段階で訪れ、それぞれの段階で異なった種類の花を咲かせる。この花信は少女が成熟する事を仄めかしている。そして梅はここで二つの意味含んでいるように見える。
26. 英文での柳永の詩における古典研究は James R. Hightower, “The Songwriter Liu Yung,” Part I, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 41.2 (1981) : 323-376; Part II, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 42.1 (1982) : 5-66.を参照。柳永の官能的な詩においては Lap Lam, “A Reconsideration of Liu Yong and His Vulgar Lyrics,” in *Journal of Sung-Yuan Studies*, vol. 33 (2003) , 1-47.を参照。
27. Ronald Egan (*The Problem of Beauty*) は、感傷や恋愛のあから

- さまな表現は北宋において受け入れられつつあり、北宋代後期である11世紀後期から12世紀初期の晏幾道（d.ca.1106）や周邦彦（1056-1121）のように最盛期であったと主張している。北宋代中期の知識人階層は彼らの詩の中にあからさまな恋愛活劇を書くことに躊躇していた一方で、彼らは詩の中にこれらの出来事に注目する傾向があったとの見解もできる。逆説的に詩の形態の曖昧な評価は男性自らが恋愛について書く事をより躊躇させたであろう。最近の議論によるとあからさまに妾に対する恋愛や官能的享楽を示すことは北宋代中期において異例なことではないが重要項目であるとしている。
28. Volppの“The Literary Circulation of Actors”でこの現象について記述されている。
29. Rouzer, *Articulated Ladies*の六章, on the Tang shift to portrayal of women as worthy partners for menを参照。
30. 郭祥正『青山集』（四庫全書, v. 1116）, 13.14b.
31. 『梅堯臣集編年校注』, 23.690。「風と月」の言葉もまた「恋愛」の意味を持つ。そのため最後の行は「時間が来れば恋愛が中庭にやってくるように貴方達も再び会えるでしょう。」と訳すこともできる。
32. 『梅堯臣集編年校注』, 23.690-691を参照。
33. 韓維『南陽集』（四庫全書, v. 1101）, 4.7b-8a.
34. 謝邁『竹友集』（四庫全書, v. 1122）, 6.7a-7b.参照。謝の詩は平凡な悲しさや寂しさの偶像を宴会や笑い声とを併記している。
35. 蔡襄（1012-1067）『蔡襄集』（上海：上海古籍出版社, 1996）6.106, 汾陽夫人挽詞二首。挽詞は一般的に皇族や高官の榮譽を讃えるために作られる追悼の詩である。私が知る限りこれは家妓に捧げられた唯一の挽詞である。
36. ここでの柳永の詩は最も明確な参考である。
37. 「朝雲墓誌銘」（『蘇軾文集』, 15.473-474）。
38. 蘇の子供の一人である迨は二番目の妻の子であると推測するが、それを証明する方法は未だ見つかっていない。（彼は名無しの妾の子である可能性もある。）
39. 『蘇軾詩集』, 23.1239-1240.
40. 『蘇軾詩集』, 38.2073-74。「三山」は道教の仙人の住居である。南宋の評者によると最後の句は秦觀が朝雲を巫山の仙人になぞらえて書いた詩に返答していると言っている。
41. 六朝時代の詩人庾信（513-581）は「趙君の妓女を見て」と題した詩を書いている。その詩の初句は緑珠の「歌う扇」と趙飛燕（観王朝宮廷の有名な芸妓の妾）の「舞う衣裳」を再現している。『庾子山集』（四庫全書, v. 1064）4.50b）を参照。蘇軾がここで引用する前にこの句は唐代の数々の詩で挙げられている。
42. 『蘇軾詩集』, 40.2202-2203並びに『蘇軾文集』, 62.1909-1910.
43. 蘇軾は1084年末に旅をしていたことが知られている。王水照編『宋人所撰三蘇年譜彙刊』「東坡先生年譜」, 下, 66-67.参照。
44. 蘇軾は彼の最初の妻の死から10年後に書かれたと言われている詩「江城子, 乙卯正月二十日夜記夢」の中でより深い愛情を表現している。喻朝剛, 周航共編『分類新編兩宋絕妙好詞』（長春：吉林文史出版社, 1992）, 755.参照。
45. 『蘇軾文集』, 15.472; 20.586; 21.619; 66.2086; 63.1960.
46. Ronald C. Egan, *The Problem of Beauty*, 359-360.
47. 蘇軾「雜纂二續」（曲彥斌編『雜纂七種』所収（上海：上海古籍出版社, 1988）, 89; 97; 88, 91.
48. 『黃庭堅全集』外集, 3.914, “Zai he ji Zizhan wen de Huzhou.”
49. 『蘇軾文集』, 53.1570, 陳季常あての16通の手紙の第16番目のもの及びRonald C. Egan, “Su Shih’s ‘Notes’ as a Historical and Literary Source” (HJAS 50:2 (1990)), 577.を参照。
50. 『蘇軾全集』（四庫全書, v. 1107-1108）, 77.3「與李方叔四首」（李方叔に対する四通の手紙のうち最後のもの。）蘇軾の作品の現行改訂版においてまだこれらの手紙を特定できていない。
51. この点においてはSteven Owen, *The End of the Chinese ‘Middle Ages’: Essays in Mid-Tang Literary Culture* (Stanford, California: Stanford University Press, 1996), 132.を参照。
52. 北宋代後期の有名な政治事件で妾の母を悲しみ嘆いたという行為で起訴された官僚李定（1028-1087）の例からこの事が推測される。妾の母を嘆く行為に対する宋の法規を解釈したこの事件の概略とその重要性については以下の著書に見事に記述されている。Neil Ennis Katkov, “The Domestication of Concubinage in Imperial China” (Ph.D. Dissertation, Harvard University, 1997), 91-95.

# Understanding the role of Household Courtesans (jia ji 家妓) in the Social Lives of Northern Song literati: possibilities and limitations

Beverly BOSSLER

This article explores the roles of household courtesans (jia ji 家妓) in the social and emotional lives of Northern Song men. By reading historical sources in new ways, and especially by employing literary sources such as anecdotes and poetry, I argue that household courtesans and the banquets at which they performed were central to male socialization in the Northern Song. Literati established bonds of association, friendship, and intimacy through poetry about each other's household entertainers. Such poetry also reveals that the position of household courtesans in the eyes of their masters could vary from mere possession, to affectionately regarded servant, to the object of romantic passion or even love. The article concludes that the presence of these "dishonorable" (jian 賤) entertainers in the homes of Song literati (sometimes even as the mothers of literati sons) helped contribute to breakdown of distinctions of "honorable" (liang 良) and "dishonorable" (jian) in Northern Song society.

Keywords : courtesan (ji 妓), romance, social life, Northern Song, Su Shi